FURUSATO no HOKORI

ふるさとの誇り 其の92

流転する村
南アルプス市を襲う災害と村落移転

かつて釜無川の本流があった藤田地区と浅原地区の間の耕地

村　名	移転の時期	西　暦	移転の原因と内容
鏡中条	天文13年	1544	現釜無川本流下の神宮寺河原から崖上の字八幡に巨摩八幡宮とともに移転。
	慶長17年	1612	移村地である字八幡が釜無川の水害により浸食され、現在の地（字中ノ切）に再び移転。
藤　田	享和2年	1802	水害により、村の東半分が村の西半分の西側、加賀美村との間に移転。
浅　原	天正14年	1586	釜無川の水害により字三ツ境から、同じ村域内の内田に村居を移転。
	慶長3年	1598	内田から字宮東に移転。
	元和8年	1622	宮東から字青嶋へ移転。
	寛永19年	1642	村域に移転先がなくなり、釜無川東岸の西花輪村地内字西河原に村民のほとんどが移転。
	寛政3年	1791	釜無川の河道整理により西花輪地内の仮住まい村居に水害が多発。相対的に安定していた釜無川西岸の字中河原に帰村。
南　湖（西南湖）（東南湖）	天文年間～慶長6年頃	1532～1601頃	元の村地が、釜無川の本流となってしまったため、村を東西に分けて移転（東南湖・西南湖）。西南湖移転先は、字車田・天神ノ木・前田。
	宝永5年	1708	西南湖村は、宝永4年（1707）の地震によりさらに西側の滝沢川河川敷に移転。
和　泉	宝永5年	1708	西南湖同様、宝永4年の地震により滝沢川河川敷に移転。
宮　沢	明治32～42年	1899～1909	明治31年の釜無川の水害を契機に順次北側の清水村地内に順次移転。
戸　田	明治41年以降	1908～	明治39年からの釜無川の水害を契機に順次北側の清水村地内に順次移転。
大豆生田	天正年間	1573～1592	今福村と南湖村の間にあったとされる村。釜無川の水害により離散。

南アルプス市南部周辺の主な村落移転

水害や地震を逃れ移転する村々

豆知識　西郡筋と中郡筋

現在の南アルプス市域は、江戸時代にはその大部分が巨摩郡西郡筋（にしごおりすじ）に属していました。しかし、西郡筋と甲府盆地中央部の中郡筋との境は、かつて釜無川の本流が藤田と浅原、東南湖と西南湖の間にあった時期に、釜無川を境に決められたため、現在釜無川の西側にありながらも、浅原地区と東南湖地区は、西郡筋ではなく中郡筋とされています。

みなさんの普段目にしている川の流れ。実は永久不変のものではなく、自然の力で、時に人の力で、様々にその川筋は変ってきました。

最近の研究では、南アルプス市と、昭和町や中央市などを隔てる釜無川の川筋も様々に変遷していて、かつて甲斐市竜王付近から東側に向かっていた流れが、戦国時代から江戸時代のはじめ頃（四〇〇～四五〇年ほど前）には、いくつかに分かれながら、その本流のひとつが現在よりも西側の若草地区の藤田と浅原の間、甲西地区の東南湖と西南湖の間に向かうようになったことが推定されています。

それまで釜無川の水害とは無縁だった地域に川が押し寄せることになり、南アルプス市域では鏡中条や南湖など、この時期に流され離散した村や移転を余儀なくされた村がいくつも現れています。

その後は、河道の整備が進み、南アルプス市側に押し寄せた釜無川の流れをふさいで、対岸に押し返す堤防（将監堤）が造られるなどしたため、釜無川の本流は東側に移り、現在の流れとなっていきました。しかし、川筋は移ってもかつて釜無川の本流があった場所は、川が氾濫した場合、洪水流の通り道となることから、その後も度々大規模な水害に見舞われています。そのため、江戸時代以降、明治に至るまで三五〇年余りにわたって、この旧河道周辺からの村々の移転の記録は絶えません。

さらに、この旧河道周辺は地盤も弱く、宝永地震（一七〇七）の際には、一部で液状化を起こし、これによって村が移転を余儀なくされたとの記録も残されています。

歴史をひも解けば、このように市域南部にあった村々の多くが、災害によって移転を余儀なくされたことに気付かれ、先人の苦労がしのばれます。しかし一方で、昔の川の道筋や、村々の災害の歴史を知ることは、今後の地域防災を考える上でとても重要な情報を提供してくれます。記録的水害が頻発し、東海地震などの大規模地震がいつ来てもおかしくないといわれる昨今、皆さんのお住まいの地域の歴史を今一度見つめ直していただければと思います。

文・資料／文化財課